

平成 28 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	山口 洋典
研究テーマ	被災経験からの受援力向上のための実践的研究：「被災地のリレー」への「準備運動」の視点から

<助成研究の要旨>

災害復興の支援においては災害発生時、つまり発災時点の被災状況に関心が向けられますが、被災された方々は発災からの時間の経過と共に災害を語る言葉に変化が見られます。例えば、2014 年の夏、宮城県気仙沼市では、ある方が「こうして出会えたのも津波のおかげ」と語りかけてきました。また、東北学院大学の方々が 2013 年 10 月の台風 18 号による水害の支援のために滋賀県に駆けつけたとき、その第 1 声は「こうやって来てくださって来たんですね」でした。この 2 つの語りに対して、前者には大きな悲しみも時間の経過と共にその意味が変化することを、後者には支援を受ける側から支援をする側に役割が変わったとき、改めて当時の支援者らの心情を追体験したことを、それぞれ見出すことができます。

本研究は、被災経験を経た後にもたらされる新しい日常において、さらには次なる災害の被災地において、過去の体験がどのように活かせるのかについて、大阪大学の渥美公秀教授による「被災地のリレー」の観点から迫った実践的研究です。そのため、次の災害発生時に被災経験の有無を問わず、支援に駆けつける他地域の方々を支援者として効果的に受け入れていくための活動モデル（活動の担い手・受け手・繋ぎ手の基本構図と、その基本構図を成立させる行動規範、役割分担、媒介手段といった社会基盤の有り様）を具体的に導き出すこととしました。アクションリサーチと呼ばれる研究スタイルにおいて、主な研究対象としたのは立命館大学サービスラーニングセンターによる正課科目「シチズンシップ・スタディーズ I」の「減災×学びプロジェクト」の受講生と教育実践の現場です。

研究代表者を含めて、合計 6 名の共同研究で行われた結果と成果は、既に多くの方法で公表してきました。そこで、研究実績について、それらの中から主要なものを紹介します。

(1)地域参加型学習の制度化における学びほぐしのための方途(国際サービスラーニング・地域貢献学会・9 月)

インディアナ大学・パデュー大学のロバート・ブリングル教授らによる学習共同体における「SO FAR」モデルをもとに、立命館大学による「シチズンシップ・スタディーズ I」のプロジェクトの有り様を比較分析しました。その結果、減災をテーマとしたプロジェクトでは「R」(Residents) すなわち住民との直接的な関係を効果的に結ぶことができ、「O」(Organization) すなわち支援団体との関係は相対的には薄くなる傾向にあることが明らかとされました。

(2)共感不可能性を前提とした被災地間支援の方法論に関する予備的考察(日本災害復興学会・10 月)

本研究の着手以降に発生した平成 28 年熊本地震も比較の対象とし、初動期における災害復興支援と、発災から時間が経過する中での継続的な関係継続の違いを比較検討しました。新潟県小千谷市から始まった被災地のリレーを取り上げた結果、時間的な側面に加えて距離的な側面が無視できず、支援者の中継が重要なことが明らかとなりました。

(3)被災地の定点観測における学習と活動の相即への身構え(日本グループ・ダイナミクス学会・10 月)

神戸での学習プログラムに参加した学生らの語りをもとに、発災当時は生まれていなかった学生たちにとっては、主体的な学びのためには協力者の関与の仕方が重要となることが明らかとなりました。そして、学習プログラムを継続・発展する中で、学習者ではなく協力者のコミュニティが拡張していく可能性を確認した。

これらの学会発表に加えて、本研究の助成を得て、2 月には公開研究会が開催されました。その内容は立命館大学のホームページでも紹介 (<http://www.ritsumeai.ac.jp/news/detail/?id=600>) されていますので、ご参照ください。

また、学術論文「サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方」も採録(京都大学高等教育研究第 22 号)となりました。全文が無料で公開されていますが、ここでは ODA 等の国際協力活動でなされるロジックモデルを参考に、現場での支援活動を組み込んだ教育実践における 4 つの実践モデル(基本、惰性的進行、拘泥的進行、回復的進行)を示しつつ、想定外に対応するための回復的進行が学習プログラムの構想と設計のためには重要となることを確認した上で、学習評価と実践評価の 2 軸についてプログラムの事前・中間・事後のそれぞれにおいて適切な基準のもと評価者が行うことがよりよい活動のために重油緒となることを明らかにしました。

このように充実した共同研究を通し、その成果を逐次発表してきましたが、大きな課題に向き合うと共に、ささやかな展望を見出すこととなりました。それは研究の着手の後に発生した平成 28 年熊本地震への支援についてであり、災害復興学会での発表内でも触れましたが、リレーバトンの中継役の立ち居振るまいがうまくいかなければ、過去の経験が活かされにくいということであり、今後、西原村の農業復興ボランティアなどを事例に例証していきます。